

40年間の歩みから見えてきたもの —それは、こどもの健やかな成長を願うこと—

浦上 弘明

Some Things Revealed from Forty-Years of Effort: Hoping the Children Grow-up Healthy

Hiroaki URAGAMI

目 次

1. はじめに
2. 学校現場での歩み
3. 外から見える学校は
4. 教育の原点とは
5. 行政経験を学校現場にどう生かすか…
6. マネジメントできる校長職
7. 八尾市教育長に就任
8. 公務員という冠が取れた今
9. こども食堂の設立
10. おわりに

キーワード 子供との絆・無限の可能性・子供の育ち・教師としての情熱・リーダーシップ

1. はじめに

本文は、昭和51年八尾市立公立学校に中学校教員として赴任し、平成28年3月をもって八尾市教育長を退任するまでの40年間の私の生きざまや歩みを紹介するとともに、様々な経験から教育の原点を自分なりに見出したものをまとめたものである。また、教育長退任後、長年の夢であった地域福祉に貢献したいという思いから、「夢うららほっとステーション」（こども食堂）を立上げ、共通の想いを持ったボランティアの方々とともに活動している姿を報告するものである。

2. 学校現場での歩み

2-1. 教師の仕事…3点セット

大学卒業後、教師としての夢や不安を抱きながら、4月に八尾の中学校現場に着任。それまでの子どもとの関わりは、教育実習ぐらい。ただ身近に思えたのは、自分自身が八尾生まれで八尾育ちというぐらいであった。

教科は技術家庭科、その当時、技術家庭は男女が別学で、技術は男子のみであった。その年は、副担任で担任を持たせてもらえなく、なぜだろうという疑問と、担任を持った時には素晴らしいクラスにしようという決意のもと、教科指導やクラブ活動に力を注いだ。当時の校長先生には、1年間ゆっくり先輩教師の動きを観察することが大事だと言われ、また良き先輩にも恵まれ、始終先輩教師の自宅にお邪魔し、酒を飲みながら教育とは何かを熱く語りあい、自分なりに教師像を思い描いていた1年であった。

どんなことでも「初心忘れるべからず」とよく言われるが、この1年間の学びは、その後の教師人生に大きく影響を与えることとなる。

現場で学んだ3点セットとは、教科指導力・生徒指導力・学級集団作りの力をつけること。この3つの力については後述したいと思う。

2-2. 日刊通信にチャレンジ

教師2年目から待望の担任をすることとなる。教科の特性から、女子を教えることがないということもあり、担任としてどのように女子と接点を持つことができるか相当悩んだ時期があった。赴任した学校では、何人かの先生が、学級通信を発行されており、こどもの思いを知り、そして担任の考えなどを伝える手段として有効であると聞いていた。長年学級通信を発行されている先生の通信は、文章も上手、子どもたちに何を訴えているかが分かり、とても素晴らしいものであり、こんな通信を私も書けたらなあという思いで、学級通信を発行することを決断した。今では、学級通信を発行することが当たり前のようにになっているが、当時ワープロもない時代、全て手書きで輪転機で印刷。通信発行に要する時間は膨大であった。

担任2年目、毎日発行する日刊通信に挑戦。B4が普通サイズではあるが、記事が少ない時は、B5サイズ。一番困ったのが、宿泊を伴う行事の時である。事前に通信を作っておき、バス内で配布、こどもたちのビックリする姿に満足感を覚えたことがよみがえってくる。年間で確か230号ぐらい発行した。今でも記念に保管しているが、尊敬していた大先生には、「塵も積もれば山となる！」（冗談だと思うが）と自分がしてきたことを安っぽく言われた感じがしてショックであった。でも自分なりに達成感あふれる1年であった。

2-3. クラブ指導に熱中…でも反省も

中学校では、クラブ活動の意義は大きなものがある。私は、野球部やソフトボール部を担当していたが、ある意味生徒指導の一環であると認識していた。こどもたちは、好きなスポーツや文化の活動を通して、人として必要な人間性・社会性・協調性を学べる機会でもある。

クラスの子どもたちとの関係以上に、クラブの部員との接点は強固であったと思っている。平日の放課後と土日の休業日にも子どもたちと共に過ごすことにより、学習以外に人間として大切にしなければならないことを教えることができた。生徒指導も子どもとの信頼関係があればこそ通ずるものである。

ただ、クラブの顧問をしていると、子どもたちと人間関係が自然と出来ていると過信してしまいがちで、ついつい子どもの心の背景を気にせず、子どもの心を傷つけてしまう言葉を発していたのではと後々反省することとなる。

2-4. 生徒指導のむずかしさ

大阪府の公立高校で、クラブ顧問による体罰等で高校生が自殺した事件は、大津市のいじめによる中学生自殺と同様、ショッキングな事件であり、教育界を震撼させ、大きな社会問題ともなり、生徒指導の難しさが浮き彫りになったことをつい最近のように思い出される。

私自身、教員の間は、主に生徒指導を担当し、のびのびと子どもの指導にあたっていたが、現在の教育界ではどうであろうか？ 今回のこれらの事件を境に、先生方には、暴力や体罰等に頼らない心の通う指導が強く求められている。

2-1の教科指導力と生徒指導力の2つには相関関係があり、教科指導の高い先生は、生徒の指導も優れており、子どもとの信頼関係もできているものである。

教育長時代、八尾市に配属された新任の先生方の辞令交付式で必ず言ってきたことが、「授業が上手な先生になってほしい」そのためには、授業力を高めるための努力が必要であると訴えたのもそのためでもある。

2-5. 卒業式…それは3年間のこどもたちとの関係づくりの証

41歳まで18年連続担任。18年で11回3年生を担当し、次の進路先に子どもたちを送り出した。普通なら1・2・3年というサイクルで回っていくのだが、教科の兼ね合いから全学年の生徒を教えていたこと、また生徒指導の強化ということから、3年を担当する機会が自然と増えたものである。

365日の中で卒業式の日が、学校での最大行事であるとともに、一番先生にも生徒にも緊張感が走る一日でもある。まあ言えば、3年間の集大成の日である。

担任として、生徒の名前を呼ぶシーンが一番の醍醐味。生徒の名前を呼ぶのを間違ったら大変なので、普通名簿を見ながら呼ぶのですが、私の場合何も見ないで、生徒の顔を見て、大き

な声で呼んでいた。生徒の名前を呼ぶのもこの日が最後。3年間の歩みが思い浮かぶとともに、子どもの瞳の輝きと「はい」という返事が、私との信頼関係が出来ていたかが証明される瞬間でもある。3年間の歩みが卒業式で終結、4月から初めて出会う子どもたちとともに、また長い歩みが始まるのである。

3. 外から見える学校は

3-1. 国立曽爾少年自然の家、専門職員として

平成7年4月、大阪府公立学校現場から国立曽爾少年自然の家（以下自然の家）に転勤する。身分は、文部事務官専門職員。自然の家は、奈良県と三重県の県境の曽爾村にあり、曽爾高原はススキで大変有名な名所である。

自然の家は、曽爾高原の中腹、標高700メートルに位置し、春から秋は、主に小中学校の宿泊学習で利用されている。野外炊飯やキャンプファイヤー、ハイキング、オリエンテーリングなど様々な自然体験を経験できる施設である。

私の仕事は、主に宿泊団体の活動内容の調整、入退所式の司会・進行、朝のつどいの進行、そして主催事業の立案・計画・実施等であり、所の中核の仕事を担っていた。特に八尾の多くの学校が創設当初からこの自然の家を利用しており、歴代の専門職員は、ほとんど八尾から選ばれていた。

また、今まで学校教育しか経験のなかった私が、生涯学習の中の社会教育分野に飛び込み、3年間ではあったが、外から学校教育を観察することができ、私自身の視野が広がったように思える。

3-2. 自然体験事業でのトマトのお話

自然の家は、国の施設で青少年の自然体験活動を積極的に推進するため、先導的な事業を企画・実施することが求められている。青少年に関わる現代的課題を解決するため、様々な企画を考えるのが、私たち専門職員の果たす役割の一つでもある。

その中で、「ちびっこ集まれ！」という主催事業でのトマトにまつわる話を書きたいと思う。

小学校3・4年生対象の自然体験活動の中のメニューで、曽爾村のトマト畑で、トマトを自分でもぎ、トマトの新鮮さを味わうというプログラムである。ある女の子が、「トマトは嫌いで、今まで一度も食べたことがない。絶対食べない。」と言いだす始末。ボランティアの学生が困りはてて、私に相談。私はその子どもをなだめて、「ちょっとでいいからかじってみ、…」と言うと、子どもは泣きながら一口トマトを頬張ると、今までとは全然違う表情になり、美味しいと言って全部たいらげてしまった。

その事業が終わり、1週間後、その子どもの母親から、「自然の家での体験以後娘がトマト

好きになり感謝しています。」というお礼の手紙が届き、自然体験が子どもの生活に大きく影響を与えるものであることを実感したシーンであった。

3-3. チャレンジ無人島、7日間の大変なお話

チャレンジ無人島は、私にとってはとてもインパクトのある一生忘れられない事業である。その当時、不登校の児童・生徒が増加し、教育界はもとより大きな社会問題にもなっており、その対策が学校現場はもとより、家庭や地域社会に求められ始めた頃である。

不登校の要因は、人それぞれであり、その原因を見つけることが難しく、子どもの心を開けるかが大きな解決の糸口でもある。

自然の家では、学校・家庭・地域と離れ、今の自分の生活を自然体験を通して見つめなおす機会とする「チャレンジ無人島」を企画した。近畿地方から小中学生40人募集。あつと言う間に定員をオーバーし、抽選で参加者決定。子どものことを思う親心が応募者数で感じ取れた。

7日間の無人島生活で私たちは何をを得るのか、大学生のボランティアリーダーも子どもも自己への挑戦であった。無人島は広島県大黒神島、瀬戸内海で一番面積の広い島である。島に上陸すると、まずはトイレづくりから。びっしょり汗をかきながらスコップで穴を掘る。初日から脱落者が1人2人と、、最初から子どものひ弱さが目に映る。看護師さんの仕事の始まりである。トイレが完成すると、夕食の準備と寝床づくり（テント張り）が始まる。どのグループを見ていると、一人ぼっちで何も手伝おうとしない協調性のない子どもの姿が目に入る。初日だけで、しんどいことから逃避する子ども、辛抱ができない子ども。わがままな子どもの姿が協同作業または体験過程を通して浮かび上がってくる。

7日間の活動メニューは毎日違っていて、その中で食材を島で探し調理をする日を設定。その日は、米と水だけを渡すことになっている。山に入ったり、海に入ったり班で考え、遊びながらでの食材探し、子どもたちはとても楽しそうである。あるグループは、山で竹を切り、竹を利用して筏作りと筏遊びを、また竹の余りから籠を作り海で魚や貝などを採ってくる。夏場なので貝は気を付けなければいけないので、醤油と砂糖を渡し、よく煮て食べるように指示する。料理した貝を食べてみると珍味、とてもおいしかったことを思い出す。また、あるグループでは、山で夏ミカンを収穫。あの酸っぱさは、忘れられない味である。

私はマムシを収穫。大きなペットボトルに頭からマムシを入れ、持ち帰る。1ヶ月ほど我が家で排泄物を出させ、マムシ酒を造った。自然の家での宿直時に、同僚職員とマムシ酒を飲みながら、無人島体験談を語ったものである。島の生活で一番困ったのが、風呂に入れないこと。昼間はカンカン照りの夏の日差しを受け、体は潮焼け、ひりひりして痛い。寝る前、山に入り沢を探し、ほんの少しの水をタオルに湿らせ体を拭く。それが風呂代わりである。また、異臭は日に日に増してはいたはずが、みんながそういう状態なので、臭いはあまり気にはならなかった。

無人島生活を振り返ってみて、子どもたちは何かをつかんでくれたことと思う。学校や地域の活動では、得ることができない何かを子どもたちは発見できたと確信する。子どもたちには、もって生まれた個性があり、個性同士のぶつかり合いの中で、協調性や社会性、そして自分自身の生活面を見直すきっかけになったことと思う。当時参加した子どもたちも今では30歳以上になっており、どのような大人に成長しているのか会ってみたい気がする。

3-4. 学校とは…やっとわかりました

学校は、子どもが様々なことを主体的に学習する場であり、その支援をするのが教員の役割である。そのことは、教員の誰もが理解できていると思うが、つつい学校というところは、管理的になりがちなことが、宿泊に來ている学校の先生や生徒の動きを見ているとよくわかる。

毎年自然の家を利用している愛知県の某小学校では、子どもたち主体で行事を計画。参加している子どもたちの笑顔と瞳の輝きが他の学校とは格段の差があり、目を見張るものがあった。一方、管理的な面が強い学校では、子どもの主体性を奪っているような感じがして、とても残念で仕方がなかった。私は長年、生徒指導を担当し、集会ではハンドマイクを持ち、口うるさく注意をしていたほうであり、そういう学校を見ていると、自分と重なる所があり、非常に恥ずかしさがこみあげてきたものだった。

また、自然体験活動のすばらしさを知らない先生方もたくさんおられ、前年度行ったプログラムをそのまま使う学校もあり、宿泊学習の意義が薄れ、子どもたちの心に自然のすばらしさが届かないものとなっている学校もあった。

施設職員として学校をじっくり眺めることにより、今までの自分の姿を思い浮かべ、いかに子どもたちの主体性を奪っていたか反省するばかりの3年間であった。

3-5. 社会教育主事の資格取得

社会教育施設で勤務することにより、より生涯学習を学びたいという思いがあったので、東京上野にある国立社会教育研究所に40日間通った。思った以上に生涯学習分野は幅広く、そして深く、特に学校教育しか経験していなかった私にとって、未知の世界に入ったような気持ちと新鮮さで学ぶことができた。

また、その期間は、東京オリンピックで宿泊所として利用されていたオリンピックセンターでの宿泊。快適で過ごしやすかったことを思い出す。参加者は地方公務員や教員そして社会教育施設職員など全国から参加。夜は、ほぼ毎日いろんな方との情報交換。とても視野が広がる良い勉強になった。今でも特に兵庫県の方々とは、定期的に交友を深めている。

4. 教育の原点とは

4-1. 大阪府教育委員会に呼ばれる

曾爾少年自然の家、離任式の日には大阪府教育委員会(以下府教委)より電話がかかる。次の赴任先の件で話をしたいので、今日何時になってもいいから府教委に来てほしいとの事。丁度夜の8時頃だったと思うが、府教委に到着。当時の義務教育課の参事と面談。私の赴任先が、柏原市にある修徳学院になったとのこと。府教委に籍を残し、福祉部に出向、そして、修徳学院勤務になるらしい。

教員時代に、何人か生徒を修徳学院へ入所させた経験はあるが、施設の内部のことは知らなかったもので、どのような仕事に携わるのか尋ねてみると、技術の授業を担当することと主幹という役職で出向してもらう旨の説明だけされ、何も分からないまま、翌々日の4月1日から修徳学院職員となった。

4-2. 児童自立支援施設とは

なぜ私が派遣教員に選ばれたのかは、後で分かったことだが、前年度に修徳学院に入所している児童の学習権の保障がなされていないのではないかという問題が大阪府議会で提起され、中学校の9教科の教員免許所持者を同学院に充足するため、平成10年度より初めて学校教員を修徳学院に派遣したものである。

今まで寮長である教護が授業を担当していたが、無免許で教科指導を行っていた教科もあったことから、不足していた3教科(数学・英語・技術家庭)の教員が初めて施設に足を踏み入れたのである。児童自立支援施設は、全国に58施設あり、各都道府県並びに政令指定都市に設置義務があり、大阪府立は修徳学院(柏原市)とライフサポートセンター(堺市)、大阪市には阿武山学園(高槻市)が設置されている。

児童自立支援施設は、昔、教護院と呼ばれていて、戦争孤児が入所していたのが始まりであったが、時代とともに入所に至るケースも変容し、現在は、虐待を受けている児童や非行に走り裁判所の審判により強制的に入所させられた児童などが在籍している。

入所児童は、全員寮生活を送る。寮長と教母(寮長の奥さん)の下で、他の寮生と共に同じ屋根の下で暮らす。基本的な生活習慣は、寮生活で身に着け、学習は敷地内にある学校で行い、平成25年度からは、一般の学校と同じように1日6時間の授業を受けている(私が勤務していた3年間は、午前中のみ授業、午後は寮での作業やクラブ活動が主であった)。また、クラブ活動も全員参加で、特に野球・バレーボールは、児童自立支援施設のみで行う近畿大会・全国大会まであった。

寮長は、児童が基本的な生活習慣や学習習慣を寮や学校での生活で身に着けることを目的としている。自信を失っている児童に様々なことにチャレンジさせ、成功したときの喜びや達成

感を味わってもらうことにより未来への展望が持てるよう、また自己自立ができるよう、日々愛情を持って指導に臨んでいる。入所児童は、自信をつけ、また失敗したときは悔し涙を流し努力する。このようにして自己自立をめざし寮での生活を送っている。

4-3. お前のせいでここに入れられたんや

子どもにとって修徳学院に入所が決まり、入所する日は地獄。それまでは、社会のルールからはみ出し、自分勝手なことをしていた彼らが、一旦施設に入ると、自由な行動は許されない。

ある入所時の一例を紹介する。母親、学校の先生、子ども家庭センターのケースワーカーが車から降りたが、入所する女子児童が車内で泣き頑固として降りようとしなない。母親が子どもを降ろそうとすると、「お前のせいでここに入れられたんや」と言って母親に殴りかかる。こういうシーンは、施設入所時によくあることである。

子どもの心は荒んでいる。非行に走る子どもたち。多くが人間不信、大人不信であり、愛情に飢えている子どもが多い。この例は、親不信から非行に走ったケースであったが、この生徒が自己自立するためには、親子の関係を修復することがまず大前提である。

4-4. 孫が暴力を振るうんです

別の入所時のシーン。おばあちゃんと孫（小学5年生）そして子ども家庭センターのケースワーカーとの面談時、私がおばあちゃんに、どうしてお孫さんが入所することになったのかと尋ねると、おばあちゃんは、言いにくそうに語り始めた。実は、この子の両親は、生まれて間もなく離婚。父親は再婚し子どももできて幸せな生活を送っている。母親もまた再婚し、別に暮らしているとの事。そういう事情で、おばあちゃんが子どもを引き取り一緒に生活するようになったようだ。小さい頃は、言うことも聞き、面倒も見やすかったのだが、高学年になるにつれ小遣いをせびるようになり、毎日500円渡していたようだ。ところが、遊ぶ金欲しさにもっと高額なお金を要求するようになり、それを断ると暴力を振るう為、一緒には暮らせない状態となり、施設に預けることになったようである。

どうしてそんなことになったのだろうか。両親が離婚したとしても、どちらかが子どもを養育するべきである。また、親の愛情を受けられず、両親への憎しみしか残っていない子どもの気持ちを考えると、何とも言いようのない怒りを覚えたものであった。

入所してくる子どもたちの生活環境は様々であるが、子どもが成長するために必要な環境が整っていない場合が多く、心に傷を背負いながら、子どもたちは必死に耐え生きているのである。施設では、親代わりの寮長・教母の深い愛情の下、家庭的な雰囲気の中で心の傷を癒すための営みが日々行われている。

4-5. ほぼ1ヶ月で子どもたちの生活は安定…そのわけは？

学校関係者や更生保護団体等のみなさんが、修徳学院の見学に来られる時がある。よくある感想に、あれだけ非行に走ったり、生活面の乱れがある子どもたちが、なぜこれだけ早く普通の子どもになれるのかというものがある。

その答えは、寮での3度の食事とみんなと共に食べるという食事の団欒、そして睡眠時間の確保等が大きくそのことにより、次第に子どもたちの表情に明るさが戻り、寮長・教母の日々の指導により言葉遣いも改善されている。子どもたちの心の安定につながっていることが、生活の安定に繋がっているものである。

食育は子どもたちの成長に欠かせないものである。それまでの子どもたちの生活は、悲惨なものであり、1日3食満足に食べておらず、睡眠も昼夜逆転の子どもが多く、心の不安定から起きる生活面の乱れで様々な問題を起こしていた。

また、寮長・教母や寮長夫婦の子どもたちと一緒に生活することで、家庭が一番安心して暮らせる場所であると気づき、今までの自分を見つめ直すきっかけを作っていることも、子どもたちの生活が改善されている要因でもある。

4-6. 子ども心の背景をどう受け止めるか

自分から悩みなどを語ろうとはしない子ども心の心の中を知ることは非常に難しい。生活面に乱れがあり、非行に走る多くの子どもたちと接してきたが、殆どの子どもたちは言うに言えない心に深い傷を負いながら生きている。人間不信、特に大人不信から立ち直るためにも多くの子どもは、保護者との関係を修復することが大前提となる。

入所している子どもとこんな話をしたことがある。「いつの時代に戻りたい？」と聞いた時、「小学校2年生に戻りたい、両親と一緒にサッカーをしていた頃が一番楽しかったから」と懐かしそうに語ってくれたことを今でも思い出す。その子は、その後両親の離婚により心の傷を負うことになる。

私は、「子ども心の背景」とは、他人には言いたくない心の奥底にあるものであり、いかに教師がその子ども心をつかみきれるかが大きな鍵となる。若い教師時代は、がむしゃらに子どもと向き合っていたが、心の背景に迫った指導は不十分であったと後悔している。

この施設での課題の抱えた子どもたちとの関わりから、子どもとの関係づくりで一番大切なことを学ぶことができた。後に私が校長時代を迎えた際に、生徒指導面でのリーダーシップを発揮する上でとても役立つことになる。

5. 行政経験を学校現場にどう生かすか…

5-1. 指導主事の役割とその責任

さて、指導主事は学校を訪問し、学校に対し指導と助言をする仕事であり、指導主事が発する言葉には責任が伴うものである。例えば、各学校では教員の教科指導力を向上させるために授業研究を実施しているが、その授業の講評を教育委員会へ依頼する。教育委員会は指導主事を学校へ派遣し、授業観察と指導者への指導助言をさせることになっている。指導主事は、指導案をもとに事前に授業のポイントを調べておき、授業を観察した後の反省会において教員に対して指導助言を行うのである。研究授業に関しての準備に要する時間は莫大であるが、指導主事としての力量を高めるためには、とても大切な時間でもある。

また、指導主事には危機管理対応力が強く求められている。例えば保護者から苦情の電話がかかってくることがある。なぜ保護者が学校に対してそれほどまでに不信を抱いているのか、なぜ怒っておられるのか、顔も見えない相手の言葉から、何が原因なのかを察し、委員会として適切な対応をとることが求められる。それを誤ってしまうと、後々その事象の解決が難しくなるケースもある。

学校不信を招いている要因は、ほぼその事象に対する学校としての説明責任が果たせていない場合が多い。何が保護者を不信にさせているのか、また学校の指導の方針は間違っていないのになぜ保護者が納得できていないのか、その見極めが指導主事には欠かせないのである。この危機管理意識の醸成と危機対応能力が指導主事に求められており、将来管理職として学校に戻ったときの学校運営に生かされるものである。

学校現場から初めて行政（教育委員会）に転勤してきた指導主事に、市役所の職員と共に仕事をするにあたって、学校現場の考え方だけでは通用しないことをよく言ったものである。行政職の職員から行政の果たす役割や仕事を学び、多角的な視点で物事を考えることから、自然と視野も広がり学校現場に戻った時には必ず行政経験が生きた学校経営が出来ると言ってきたことを懐かしく思い出す。

6. マネジメントできる校長職

6-1. 心に残るメッセージ

人生の中で、心に残っている「忘れられない言葉」は誰にでもあるものである。教師生活の中でもやはり経験から自ずと発せられる先輩の言葉には、何か重いものを感じるものである。

平成18年3月31日、新任校長の辞令交付式で、先輩校長からの助言が、それにあたる。「所属の学校の先生のことを知るには3か月かかるが、校長は1日で評価される。」新しく赴任する校長がどんな人物なのか、教員は興味深々で観察する。元気で明るいのか、偉そうにしていな

いか、責任感やリーダーシップがあるかなど、校長の発する言葉や行動を1日にして判断されるものである。

校長初日は、この言葉を心に刻みながら各先生方と接したことを思い出す。またこの助言は、その後機会あるごとに、いろんな場面で活用させていただいている。

6-2. 私の校長像

(1)校長室でのランチタイム

校長になったら是非挑戦してみたいことがあった。それは、子どもたちの様子や考え方、生活面での不安や悩みを出来るだけ校長として知っておきたいという思いから、昼食を一緒に摂る「校長ランチタイム」をスタートさせた。

校長室にクラスの1班ずつ子どもたちを呼び一緒に弁当を食べる。最初子どもたちは緊張気味なのだが、一旦一緒に弁当を食べだすと少しずつ笑顔がでてきて、いろんな話をしてくれる。担任の先生の性格や癖の話、クラブの練習や試合の事、そして、友だちのことや自分の将来像を語ってくれたり、たった20分ぐらいの事であるが、話し方や態度でどういう性格の子どもなのか、また学校に期待していることなどを把握することができる貴重な時間であった。

心配な子どもがいればその日のうちに担任に報告し、先生方と共有化を図る。そのことが、子どもの生活面の改善にも役立つことが多かった。

(2)「浦ばなし」の発行

2つ目に実践したのが校長通信。今学校はどのように歩んでいるのか、また子どもの頑張っている姿を保護者の方には是非お伝えしたいという思いから発行するようになった。1年間で85号発行できたことは、自分にとっても財産になり、この「浦ばなし」の発行が、次の教育長在任期間に発行していた「教育浦ばなし」にもつながるものであった。この「浦ばなし」は、学校・保護者・子どもの3者を繋ぐ架け橋となり、保護者からは特に好評であった。

また、校長として学校の教育目標とその達成状況の説明を果たすこと、そして子どもたちがどのように育ってほしいかといった私の願いをお伝えするものでもあった。(資料として「浦ばなし」を掲載)

[illegible][illegible]

(3)かりんジャムが大逆転を生む

校長として赴任して1校目の冬にテレビやマスコミ等が学校に押し寄せてきたぐらいの大きな出来事があった。校長赴任の前々年度の大きな問題事象が発覚し、あるテレビ局が昼のニュースで本校の校門を放映した。他の学校の校長から「テレビであんとこの学校映ってるで」という連絡が入り、その時点から学校の危機管理対応が始まることになった。電話対応は窓口一本化で教頭が、私は今後の対応を全職員に指示し、その後はマスコミ対応に終始する。夜は、PTA役員会を開催し、保護者説明会の日程を決定。その間、テレビを見ておられた保護者や住民の方から学校へ苦情の電話が殺到する。

その中の 1 件の苦情がすさまじいもので、いくらその事象の説明をしても納得してもらえず、明日の朝〇時に行くから待っておくようにと言って電話を切られた。私としては、保護者の方に納得していただくまで丁寧に説明するつもりであったが、余りにも勢いがすごく、電話では十分にできなかった。明日の朝はどうなるだろうかと不安ながらに学校を後にした。

そして、その時がやって来た。保護者が校長室に来られ、第一声が「校長先生、昨日は言い過ぎてごめんな」。あの後、子どもと校長先生のことで話をしていると、子どもが「あの校長は、とてもアクティブで、昼食の時は校長室で私らと一緒にご飯を食べて、私は冷蔵庫に保存してある食パンにかりんジャムをぬって食べさせてもらったよ」ということを聞いたんやと。子どもの事をよく考えてくれている校長だとわかり私のイメージが一変したようである。

このかりんジャムは、校内で育ったかりんを収穫し、調理室で私がジャムにしたものであり、弁当を持って来ていない子どものために用意をしていたものである。

子どもと校長との信頼関係が、今度は保護者との信頼にもつながるものであることを実感できた事例である。保護者は帰り際に、「校長先生、絶対応援するからこれからも頑張っとな！」と言って笑顔で帰られた。

(4)私の校長像、、他にないアクティブな校長

校長は、学校の最高責任者としての自覚と責任、学校経営ビジョンの策定、教育への情熱、教職員との信頼関係の確立など、校長としての資質が問われる役職である。

私は校長として2校で勤めたが、今思い出すとやはり、子どもや保護者との接点を出来るだけ多く作り、生の声を聞き、学校運営に生かすことを心がけていた。

朝一番の仕事は、校門付近の掃除、散歩されている地域の方々と朝の挨拶、「校長先生、毎日ご苦労さんですね」と声をかけてもらおうと何かしら嬉しい気持ちに、、、その後子どもたちが続々と登校、子どもたちとの朝の出会いがスタートする。「あっ、いつもと表情が違う、暗い。」と感じたら、職員朝礼後に担任に報告。担任は、朝の学活で子どもの表情を観察し、すぐさま対応、、、子どもだけではない。教職員の表情を感じ取るのも校長の務めである。元気がないと感じたときは、すぐさまその先生と何気ない会話をして心の内を探る。朝の30分は、一日で一番大切な校長の仕事の時間である。

また、子どもたちとコミュニケーションをとることも常に心掛けなければならない。特に授業を巡回する中で、授業に集中できていない子どもたちの把握や、休憩時間に子どもとの何気ない会話から思いを知ることはとても重要である。

先生方が捉えている子ども像とその子どもの考えや思いが違っている場合もあり、その事が原因で担任と子どもの関係が悪くなっているケースもある。子どもの心の背景の真実を知り適切に対応することこそ、子どもとの信頼関係が築かれるものである。

教員の体罰が大きくクローズアップされた時期があり、体罰による生徒指導ではなく、子どもの心に寄り添った指導が学校現場に求められるようになった。そういったこともあり、各学校において生徒指導の研修が格段に増えている。どういった時に、子どもとの会話の必要性や重要性を、先生方に助言したことを今も思い出される。

クラブ活動を見学することも、子どもたちを知る良い機会である。中学校でのクラブ活動は、子どもにとっては学校生活の中で楽しい時間の1つである。授業やクラスでの顔とは違った一面もクラブで垣間見ることができる。

また、私はクラブ指導の経験から、クラブ活動は生徒指導の一環だと考えており、クラブ活動は、人間性の基礎を培い磨く、絶好の機会であると考えている。さらに、私は、土日の運動部の大会（公式戦）や文化部の発表会等には積極的に応援に駆け付け、子どもたちの頑張りに必死に声援と拍手を送っていた。応援に来ていただいている保護者とも子どもが頑張っている姿を通して接点を持ち、学校に対する声を聞くチャンスにもなっていた。校長は

学校の舵取りである。船が無事航海できるように、いつでも風の強さや風向きがどうか、エンジンの具合はどうか、また乗組員の健康状態はどうかなど、ありとあらゆる面から状況を把握し、課題があればその都度改善し、航行に支障が生じないように務めなければならない。そのためにも、校長は情報収集力や企画力、判断力そしてリーダーシップが強く求められる役職である。

7. 八尾市教育長に就任

平成24年4月、私は八尾市教育長に就任する。58歳で大阪府を退職し、八尾市の特別職となる。教育長という役職は、八尾の教育の方向性の舵取り役である。

私が務めていた4年間は、幼稚園と保育所を一体化する認定子ども園化の課題、小中学校の適正規模化と小中一体化施設開設に向けての準備、土曜スクールの開催、いじめ不登校問題など数多くの課題が山積みされており、その解決に向けての対応に苦慮したことを思い出す。中でも高安地区の小中一体化施設の建設については、地元の方々と協議を重ね、様々な課題を一つ一つ解決し、ついに平成28年度4月から一体化した高安小中学校を実現させスタートさせることができた。

土曜スクールは、大阪で初めて八尾市でスタートさせた。校長会の協力も得ながら、保護者や地域の方々にも参加していただき様々な体験活動の機会を子どもたちに提供する事業である。

また、高校選抜時の内申書の個人評価を相対評価から絶対評価に移行することが大阪府教育委員会議で決定され、そのことに伴い、評価の公平性を担保するための方策として大阪府独自の学力テスト（チャレンジテスト）の提案がなされた。そのとき、私も含め何人かの教育長が猛反対した。チャレンジテストの点数により、絶対評価の5段階の人数が学校ごとに決められ、学校の格差が助長されることになる。また、テストの点数アップだけが求められ、学校現場での年間の授業計画に乱れが生じるとともに、点数主義という悪影響だけが顕著に現れることになる。私は考えたが、府の教育委員会議で承認され、平成27年1月には初めてチャレンジテストが実施された。何とも言いようのない虚しさだけが心に残った。

任期4年という短い期間ではあったが、それぞれの課題解決に向け、オール教育委員会として臨むことができたことは最高の喜びである。

8. 公務員という冠が取れた今

公務員として勤め上げた40年間。自分なりによく頑張ったと思う。中学校教師19年、社会教育施設3年、児童自立支援施設3年、教育委員会8年、校長3年、そして教育長4年。それぞれの勤務先でいろんな方々や子どもたちと出会う中で、教育とは何かを教えていただいたよう

な気がする。

「教育」は、無限の可能性を秘めており、よりよい教育環境と子どものやる気と努力次第でいくらでも伸びるものである。子どもの向上心を奮い立たせるのが私たち教師の使命であると考えてる。

ところで、今まで何千人という子どもたちを卒業させ次の進路先へ送ってきたが、何か心の隅にスキッとしないものが今でも残っている。それは、学校・教師・公務員という枠の中でしか子どもや保護者と接することができなかったことである。家庭の経済状況により進路選択が限られてしまう子ども、塾に行きたくても行けない子どものために、担任として実施した早朝学習や自宅を開放した学習会。昼食はいつも弁当ではなく買ってきたパンを食べている子ども、洗濯していない体操服を何日か着てくる子ども、そういう子どもたちは、親や家庭のことに対して何の文句も言わず、精一杯生きている。そういう姿が、今でも脳裏に焼き付き離れないのである。

どうにかしてそういった子どもたちの心を癒せるように、努力はしてきたが、それも限界があった。家庭訪問をするたびに、親にそれとはなく子どもの様々な生活面の改善をお願いするのであるが、強制はできない歯がゆさを何度も味わった経験がある。

また、教育は福祉と一体であるとよく言われている。今はスクールソーシャルワーカー（SSW）さんが、家庭訪問をして保護者と家庭状況を改善するためにご苦労されているが、昔は学校教員だけの対応で終わっていた。もっと早い段階から専門職の方の課題のある家庭への関わりがあったならもっと子どもたちの心を癒すことができ、将来の展望も変わっていたのではないかと思うばかりである。

今、子どもの貧困が大きな社会問題になっている中、貧困に耐えて生活している子どもたちに、ホットな居場所を提供することが大切であり、それができるのは同じ地域に住んでいる住人である。それが教育長を退任した今なら地域の仲間とともに、貧困家庭の子どもたちや保護者に、食事の提供や学習の支援、様々な体験の機会を与えることができると考えたのである。

9. こども食堂の設立

9-1. 子どもの貧困が大きな社会問題に

教育長在任期間中に、子どもの貧困が大きくクローズアップされるようになった。平成26年7月の厚生労働省の国民生活基礎調査において、子どもの貧困率が16.3%、6人に1人がそれにあたる。貧困の深さを示す指標貧困ギャップ率が高くなってきて、子どもの貧困の状況が悪化していると指摘されている。

また子どもの貧困率は、地域によってかなり偏りがあり、都市部でも地域によって貧困の子ども数には大きな差があると報告されている。さらに、子どもは自分の家庭の貧しさを隠そ

うとするので、貧困であるかどうかは見た目では分かりにくく、そういう子どもたちの孤独感をどう見つけ出し癒すかが大きな課題である。

さらに貧困は子どもの成長へも大きな影響を与えている。学力面においては、平成25年度文部科学省調査報告より、親の世帯収入が高いほど、全国学力学習状況調査（小学校6年生・中学校3年生対象）の点数が高い傾向にあり、親の経済力と子どもの学力には相関関係があるという報告がされている。また、生活面では食生活への影響があり、経済的要因や親の就労状況等により、栄養バランスの摂れた食事を摂取できていないために起こる健康面への影響や、孤食による寂しさや心の不安定、生活面の乱れなどが、人格形成する上での大きな弊害となっている。

そういう状況の中で、一刻も早く子どもの貧困への対策が国として求められており、平成26年1月に国は「子どもの貧困対策の推進に関する法律」を施行するとともに、貧困家庭の子どもを支援するNPO法人への助成や、子どもの学習支援拠点の整備のための「子どもの未来応援基金」の設置、また更生労働省では、子どもの食事、栄養状態と保護者の収入や家庭環境との関連性についての調査を実施し、支援策づくりに役立てている。

一方、NPO法人やボランティア団体の支援活動の輪も全国的に広がっており、特に経済的あるいは家庭環境の事情から、満足に食事や教育を受けられない子どもたちに手を差しのべようと、夕食を提供したり勉強を教えたりする取り組みを行っている。

9-2. 地域福祉活動に全力投入

地域の子どもの健やかな成長を願って、貧困で苦しんでいる子どもや保護者にどう支援できるかを考え、また自分自身の生きがいのためにも「子ども食堂」の設立を考えた。今まで交友のあった方々に胸の内を打ち明け、多くの方々から賛同を得て、平成28年6月8日に「夢うららほっとステーション」を立ち上げることができた。

設立趣旨としては2つあり、1つは「子どもの居場所づくり」である。食堂に来てみんなと一緒にテーブルで温かいご飯を食べることで、心のぬくもりを感じ、「自分は1人ではないんだ、みんな一緒なんだ！」という子どもに安心感と心のゆとりを持てることが目的である。また、食事の後に勉強したり、ゲームや遊びを通して友だちと一緒に過ごせる子どもの居場所を作ることである。

もう1つは、地域のコミュニティの輪を広げることである。「子どもたちに温かいご飯を作ってあげよう」を合言葉として、集まったボランティア同士のつながりを更に深めるとともに、子どもを介しての保護者同士のネットワークの構築、さらには子どもの貧困に係る地域全体での支援の輪を広げていくことが目的である。

また、私は八尾で生まれ、八尾で育ち、地域の方々や今まで出会った人たちのお蔭で今の自分があると感謝しており、その恩返しとして地域の子どものために保護者の支援に関わりたくと

考えたのである。

9-3. 夢うららほっとステーション立上げまで

夢うららほっとステーションのボランティアメンバーは、地域で活動している読み聞かせの会「おむすびの会」、そしてボクシングを通して青少年の更生保護活動をされている八尾市BBS会のみなさんとで構成されている。子ども食堂の名前は、みんなの想いを表した素敵なものにしたいと考え「夢うららほっとステーション」と名付けた。夢うららは「春のうららの隅田川、、、」（「花」作詞：武島羽衣、作曲：瀧廉太郎）からとったもので、春のうららかさが感じ取れるように、またほっとステーションが温かい心の居場所となるようにとイメージしたものである。立上げまでは、活動内容の確認や子ども食堂に係る様々な課題の対応、地域への周知の方法、寄付金の扱い等、何回もボランティアメンバーが集まり協議を重ねた。

一番の大きな課題は、衛生面の問題であった。営業許可申請が必要なのではという指摘もあり、保健所に出向き、子ども食堂の趣旨を説明した。保健所の担当の方は趣旨を理解していただき、申請の必要はないと判断され、第一の課題は解決した。ただ食材を扱う活動であるということと食中毒の心配もあり、私が念を入れて食品衛生責任者の資格を取得することとなった。

次の課題は、場所の確保と周知の方法であった。平成28年12月までは地域のコミュニティセンターの所長さんのご配慮で、優先的に活動場所を確保していただき解決したが、肝心の子どもや保護者の参加が少なかったらという不安が心をよぎった。

そこで考えたのが、チラシの配布による周知である。コミュニティセンター管轄校区の放課後児童育成室（保育を必要とする子どもたちが放課後の時間帯に活動するクラブ）への配布が一番効果的であると考え、市役所の担当部局に配布の依頼を申し入れたのではあるが、趣旨は理解できるがチラシの配布については課題があるということで断念。

次の手は、スーパーマーケットの店頭での配布である。週末にボランティアメンバーが手分けしてチラシの配布を行った。「これは、何ですか」と尋ねてくれる人もおられ、配布する意義はあったと感じている。

3つ目の課題は、運営するための資金集めである。まず考えたのは寄付金を募ること。知人を介し趣旨を説明し、賛同された方から寄付をいただくことになった。1年間の運営資金は、見積もっても50万円を超える数字である。ボランティアのみなさん方の積極的な働きかけで子ども食堂をスタート出来るぐらいの資金が集まったのである。また、日増しに寄付の申し入れも増えてきて、お米などの食材、さらにはパン屋さん、ケーキ屋さん、豆腐屋さんやコンビニ店など様々な店や方々からご寄付をいただくようになり、毎回それらの食材を活用した食事が提供できている。みなさんの温かさに、ボランティア一同感謝しているところである。

9-4. 夢うららほっとステーションスタート

平成28年6月8日、待ちに待った食堂開催初日。メンバー全員に緊張感が走る。できる範囲のPRはしてきたつもりだが、何人来てくれるかととても不安であった。17時にはボランティア一同スタンバイができており、そして開始と同時に子どもたちや、保護者が続々と食堂に入ってきてくれたのである。「やったー！」という喜びと感動がボランティア全員の心を満たしてくれた瞬間であった。その日は見学者を含めて100名以上の方の参加があり、会場内は熱気に包まれていた。カレーライスの味も絶妙で、多くの方々に喜んでいただけたのである。その日の状況は、「ほっと浦ばなし」活動報告①に掲載している。



9-5. どんどん増える食堂の参加者

子ども食堂は月2回開催している。毎回新しい子どもたちや保護者の顔が見られ、登録者数も平成28年11月末現在で80名を超えた。私は初めて見る子どもや保護者には必ず話しかけるようにしており、「また美味しいごはん食べにおいでや、学校の宿題も持ってきて教えてもらいや」などと声をかけている。子どもたちが美味しそうにごはんを食べ、笑顔で友だちと話をしている姿を眺めながら、「この温かな居場所を必要としている子どもはもっと沢山いるだろう。一人でも多く来てほしい」と、ボランティアメンバーはみんなそう願いながら活動しているのである。

食事をした後の子どもたちの活動は、学習や読書、工作、そして様々な遊びが中心である。

子どもはどんどん増えてきたため、今まで借りていた部屋だけでは収まりきらず、もうひと部屋借りることとなった。また、子どもたちに様々な体験の機会を提供したい思いから、いろんな知人にお願いし、子どもたちが興味・関心を抱くようなイベントの企画も考え、月に一度は実施している。例えば、科学分野が得意な中学校の先生にお願いし科学マジックショーを、また二胡コンサートや台湾料理の実習（大阪経済法科大学留学生在が料理指導）、さらには豆腐作り体験など、こどもだけではなく保護者の方にも好評をいただいている。

9-6. 今後の課題

こども食堂は、ボランティアのみなさまや寄付をしていただいた方々のお蔭で、順調に運営できている。活動場所や利用日の優先使用もコミュニティーセンタのご配慮で平成29年以降も心配なく利用可能となりとても喜んでいる。

今後の課題は、保護者同士のつながりをどう作っていくのかである。今でもすでに、食事をみんなで共にすることで、各テーブルは色んな話で盛り上がっているが、子どもたちが活動している時間帯に、もっと保護者同士のつながりを深めることができるような方法を考えたいと思っている。また、学習は現在月2回であるが、さらに回数を増やすことにより学習習慣の定着と学習意欲の向上を目指したものに出来たらと考えている。

10. おわりに

本論文は、私の40年間の歩みから培った教育観をお伝えしたつもりである。教員を目指したい学生や、現在学校現場で教壇に立たれている先生方や管理職の先生方、教育行政に関わっておられる方々、さらには児童養護施設などの福祉の仕事に就かれている方などにとって、少しでも参考になればとの思いで綴ったものである。

40年間の歩みをひもとく中で、その時代の自分の考えが浅はかだったり、自分に甘かったり、また自分が誇らしく思ったり、様々な思いがよみがえってきた。また、子どもたちやお世話になった先輩方の顔が目の前に浮かび、とても懐かしく思い出され、こういう機会を与えていただいたことに感謝するばかりである。

最後に、私の職業観を少しお話しすると、私は「楽は苦の種、苦は楽の種」という言葉をモットーとして毎日を送り、教師として働いてきたつもりである。逆境という「苦」が自分の前に立ちだかったときに、どう、その「苦」を乗り越えていくのかと考え行動し、そして、その「苦」を乗り越えたときの満足感や達成感を味わえる「楽」しさを自分に求めて仕事をしてきたのである。この実践報告を読まれた方々にとって、私の歩みが少しでも皆様方の仕事の役に立ち、心の支えになれば、これほど幸せなことはないと思っている。